小学校

平成7年度

教育研究員研究報告書

国　語

東京都教育委員会

平成７年度

教育研究員名簿

低学年分科会	中央	豊海小	□菊池　佳子
	台東	金竜小	清水惠美子
	品川	第二延山小	糸川　順子
	練馬	豊玉南小	○長南満里子
	小金井	前原小	篠原　敦子
	小平	小平第四小	内田　直之
	保谷	本町小	瀧口裕美子

高学年Ⅱ分科会	新宿	四谷第六小	渡辺　敬介
	中野	丸山小	中村　貴子
	杉並	済美小	駒形みゆき
	八王子	第九小	高木　健示
	八王子	元八王子東小	□中原裕見子
	三鷹	高山小	小林八千代
	日野	潤徳小	清水　絢子

中学年分科会	港	白金小	□堀口　由美
	江東	亀高小	八嶋ノリ子
	世田谷	船橋小	五百川良子
	世田谷	桜丘小	中田優美子
	葛飾	金町小	土屋　宏幸
	武蔵野	第三小	若杉　貞子
	町田	町田第三小	安永　美紀

特設分科会	北	滝野川第五小	川崎　美幸
	板橋	常盤台小	◎飯島　淳
	足立	渕江第二小	成田　雅樹
	練馬	石神井小	□品川　清美
	青梅	第２小	園山　美幸
	清瀬	清瀬第三小	三宮美枝子
	東久留米	第五小	藤本　和世

高学年Ⅰ分科会	墨田	小梅小	子安　公子
	大田	中萩中小	□澁谷　美江
	大田	田園調布小	横溝　宇人
	荒川	第二峡田小	小幡　育代
	足立	中川北小	前田　修郎
	江戸川	臨海小	上林　景一
	江戸川	小岩小	揚村　智子

◎　全体世話人

○　全体副世話人

□　分科会世話人

担当　　教育庁指導部初等教育指導課指導主事　　坂東文昭

目　　次

Ⅰ　共通研究主題　　児童が進んで言語活動の基礎・基本を身に付け活用する指導の工夫

1　共通研究主題設定の理由 …… 2
2　共通研究主題に対する基本的な考え方 …… 3
3　研究の内容と方法 …… 3
(1)　研究の内容
(2)　研究の方法
(3)　研究の構造

Ⅱ　研究の内容
1　言語活動の基礎・基本 …… 5
2　言語活動の基礎・基本に関する児童の実態 …… 6
3　言語活動の基礎・基本〔読みの学習における系統〕 …… 8

Ⅲ　実践事例
1　読解単元における学習指導
○　第２学年　教材名「力太郎」 …… 10
○　第３学年　教材名「ヤドカリのすみかえ」「ありの行列」 …… 13
○　第６学年　教材名「太陽のめぐみ」「オゾンがこわれる」 …… 16
○　第６学年　教材名「長屋王木簡の発見」 …… 18
2　特設単元による学習指導
○　第５学年　単元名「心を言葉に」 …… 21

Ⅳ　研究の成果と今後の課題 …… 24

＜概要＞

これからの学習指導では，単に知識や技能等を身に付けるだけでなく，それらを様々な場面で生かしていけるようにする態度や能力の育成が求められている。

本研究は，国語科の基礎的・基本的な内容を“新しい学力観”の視点からとらえ直し，それを「言語活動の基礎・基本」として学習指導に定位することにより，児童の学習に対する主体性とより確かな言語能力の育成を目指したものである。

Ⅰ　共通研究主題　　児童が進んで言語活動の基礎・基本を身に付け活用する指導の工夫

1　共通研究主題設定の理由

児童の側に立つ教育

学校教育においては，児童一人一人がこれからの社会の変化に対応して主体的，創造的に生きていくことのできる資質や能力の育成が期待されている。そのためには，児童が本来持っているよさや可能性を認め，伸ばすとともに，児童が基礎的・基本的な内容を自己実現に役立つものとして，自らの力で獲得し活用できるようにすることが大切である。このことは，児童の側に立つ教育の創造を目指すことであり，教師においては「自立して学ぶ児童を育てる」という指導観，児童においては「学習は自ら学びとるもの」という学習観を確立することが重要であることを示している。

国語科教育の課題

国語科の学習指導においては，児童一人一人がよさや可能性を発揮しながら進んで教材とかかわり，自ら考えたり判断したり表現したりする活動を通して，言葉による表現力や理解力を身に付けることが大切である。また，その過程において，必要な言葉にかかわる知識や技能を身に付けることが求められている。そのためには，こうした言語活動を児童一人一人の自己実現の過程であるととらえ，児童が言葉を学ぶことの楽しさを味わいながら言葉の力を身に付けたり生かしたりする学習指導を展開する必要がある。

学習指導改善の観点

このような児童の主体的な学習を展開するためには，児童の側に立って，これまで陥りがちであった一方的，共通的，形式的な言葉の指導を見直し，次の観点から改善を図る必要があると考える。

(1)　言葉に対する興味・関心，思いや願いを生かす

指導内容を一方的に教え込むことにより，かえって国語嫌いの児童を生み出しているとの指摘がある。これからは，児童の言葉に対する興味・関心を高め，学習への動機を与えることによって，児童が自分の力で学習を進め，言葉を学ぶことの楽しさを感得できるようにすることが大切である。

(2)　児童の個性や言語能力の実態を踏まえる

入門期の平仮名の読み書きの段階から，児童の言語能力には大きな個人差が見られる。指導内容を共通的に身に付けさせる一斉指導を見直し，児童一人一人のよさや可能性，言語能力の実態に即しながら，共感的な児童理解に基づく個に応じた指導が展開できるようにすることが大切である。

(3)　身に付けた言葉の力を学習や生活に生かす

言葉を形式的に操作させたり習得させたりするような指導では，児童が学習した内容をその後の学習や生活に生かしていくものとはなりにくい。これからは，既習事項をもとに自分の考えで取り組んだり，身に付けた力を活用したり応用したりすることによって，言葉のすばらしさや学習したことのよさを体得させていくことが大切である。

以上の課題を踏まえ，本研究主題を設定した。

2　共通研究主題に対する基本的な考え方

新しい学力観と基礎・基本

児童一人一人が，個性を発揮しながら，言葉を通して考えを深めたり，自己実現に必要な基礎的・基本的な内容を自分のものとして身に付けたり生かしたりするためには，国語科においても，学ぶ意欲や思考力，判断力，表現力などを重視した“新しい学力観”に立つ授業を創造することが求められている。

国語科においては，これまでも基礎的・基本的な内容の指導が大切であることは繰り返し強調されている。しかし，児童の活動を重視するあまり，身に付けるべき基礎的・基本的な内容が不明確になってしまうことや，反対に一定の知識や技能を基礎的・基本的な内容として，一方的，共通的，形式的に教え込もうとするあまり，児童の学習が受け身になってしまうことは，先述したとおりである。

言語活動の基礎・基本

このことから，国語科における基礎的・基本的な内容を“新しい学力観”の視点からとらえ直し，児童一人一人の自己実現に真に役立つものとして機能させていく必要があると考える。そこで，本研究では，こうした基礎的・基本的な内容を「言語活動の基礎・基本」として押さえ，これを学習指導の中にしっかりと定位することによって，児童の中に学習の主体性と，より確かな言語能力の育成が期待できるものと考えた。

本年度は，読みの学習指導を中心に検証することとした。

3　研究の内容と方法

(1)　研究の内容

児童が言葉に対する興味・関心を高め，基礎的・基本的な内容を確実に身に付け，活用できるようにするための学習指導の在り方を追究する。

① 国語科の基礎的・基本的な内容を“新しい学力観”の視点からとらえ直し，「言語活動の基礎・基本」として設定する。

② 「言語活動の基礎・基本」として設定した3項目の観点に基づき，児童の言語活動の実態を調査し，読みの学習における系統化を図る。

③ 「言語活動の基礎・基本」を身に付け活用する指導の工夫について，授業研究を通して検証する。

(2)　研究の方法

5つの分科会を構成し，それぞれの研究主題のもとに研究を進める。

・低学年分科会　言葉の働きに気づき，楽しんで使う学習活動の工夫

・中学年分科会　言葉の意味や働きをとらえ活用する学習活動の工夫
— 説明的文章の読みを通して —

・高学年Ⅰ分科会　読みの過程で言葉の大切さに気づき，進んで活用する学習活動の工夫

・高学年Ⅱ分科会　言葉の働きに着目し活用する児童が育つ学習活動の工夫
— 説明的文章の読みを通して —

・特設分科会　言葉への関心をもち，意欲的に活用する児童を育てる学習活動の工夫　— 特設単元を通して —

(3) 研究の構造

共通研究主題

教育の今日的課題
新しい教育課程
国語科教育の課題

児童が進んで言語活動の基礎・基本を身に付け活用する指導の工夫

児童の言語能力と国語科の学習指導の現状

＜目指す児童像＞

・言葉に興味・関心をもって意欲的に学習する児童
・表現や理解の過程で確かな言葉の力を身に付ける児童
・身に付けた言葉の力を学習や生活に生かしていく児童

新しい学力観に立つ基礎・基本

児童の学習観・教師の指導観の転換

＜言語活動の基礎・基本＞

新しい学力観の視点からとらえ直した国語科の基礎的・基本的内容

（ア）言葉に対する関心・意欲・態度	（イ）言葉に関する知識・理解・技能	（ウ）個々の既有の表現や理解の能力

学習指導の工夫

読解単元や特設単元において，

「言語活動の基礎・基本」を確実に身に付けるための工夫

「言語活動の基礎・基本」を積極的に活用するための工夫

児童の意欲を高める学習指導

個々のよさを生かす学習指導

Ⅱ　研究の内容

1　言語活動の基礎・基本

「言語活動の基礎・基本」は，児童が主体的な言語活動を展開できるようにするために，国語科の基礎的・基本的な内容を“新しい学力観”の視点からとらえ直したものである。これからの学習指導では，知識や技能等を身に付けるだけでなく，それらを様々な場面で生かしていけるようにする態度や能力の育成が大切である。この意味から，「言語活動の基礎・基本」を知識・理解・技能などの側面からだけでなく，関心・意欲・態度などの情意的な側面も含め，多面的にとらえていく必要があると考え，次のア～ウの３項目を設定した。

ア　<u>言葉に対する関心・意欲・態度</u>

これは，児童が進んで言葉にかかわり，身に付けた知識や技能を生かしていこうとする態度や能力である。児童一人一人が豊かな自己実現を目指し主体的な言語活動を展開するための原動力であり，情意的側面からとらえた基礎的・基本的な内容であると言える。また，身に付けた知識や技能，考え方などを実際に活用し，そのよさや有用性が感じ取れることによって，児童の言葉に対する興味・関心は更に高められるものと考える。

イ　<u>言葉に関する知識・理解・技能</u>

これは，児童が言語活動を展開する過程で身に付けていく知識や技能であり，学習指導要領における「言語事項」として系統的に示されている内容である。発音・発声，文字，表記，語句，文・文章，言葉遣いに関する，こうした基礎的技能は，ややもすると教師が一方的に教え込んだり，形式的に習得させたりする面が見られるが，児童が言葉による表現力や理解力を身に付ける過程で，その必要性が自覚できるようにすることが大切である。

ウ　<u>個々の既有の表現や理解の能力</u>

これは，これまでの言語生活や学習経験によって個々の児童が身に付けている言語能力である。個人差はあっても，児童はこれまでに身に付けた力を基礎として新しい学習に取り組み，多様な反応を示すものである。教師はそこに児童一人一人のよさや可能性を見いだし，支援していくことが大切である。また，様々なつまずきの原因は何かなどを分析，評価し，指導に生かすことも必要である。このような個に応じた指導を充実させるためにも，基礎的・基本的な内容を教師の側の視点からだけでなく，児童の側の視点からとらえることが大切である。

上記３つの項目は，それぞれ独立しているものではなく，互いに影響し合い，相乗効果をもたらすものと考える。また，これらは学習を重ねるにしたがって高まり，その高まった状態から次の学習が開始されるものと考える。３つの項目が，“児童の意欲を高める学習指導”や“個のよさを生かす学習指導”の充実を強く求めていることに留意して，学習指導を展開することが大切である。

2　言語活動の基礎・基本に関する児童の実態

(1)　調査の内容

読みの学習において，児童が言語活動の基礎・基本をどの程度身に付け，活用しようとしているかについて実態を把握し，系統表の作成及び学習指導の改善・充実に資する。

(2)　調査の対象と方法

○対象…都内公立小学校の２年生２４１名，４年生２２５名，６年生２４７名

○時期…平成７年９月　　○方法…質問紙法

(3)　調査結果の概要（調査の一部を示す）

＜質問１＞　文章を読むことの好き・嫌い及び理由

（ある文章の一部を引用・提示）

高学年になるにしたがって，「嫌い」の数値が高くなる。

低学年では，好き・嫌いの感情が楽しさや登場人物に影響される。高学年では文章の難易と関連し，「面倒くさい」という回答が増える。

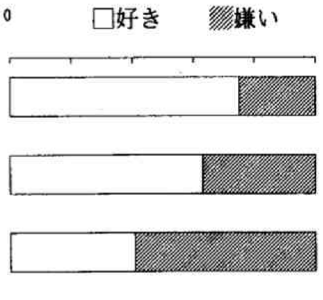
言葉の力が身に付いていかないと，面倒くさい，つまらない，だから文章にかかわりたくないという児童がつくられてしまうことになる。

言葉に対する興味・関心をもち続けるためには，言葉に関する知識・理解・技能を系統的に育てることが大切である。

【図１】

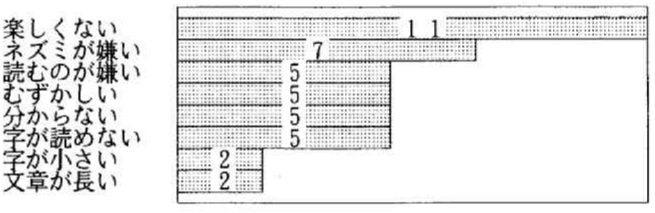
【図１】文章を読むことの好き・嫌い　（単位：％）

	好き	嫌い
２年　物語文	75.1	24.9
４年　説明文	62.9	37.1
６年　説明文	40.9	59.1



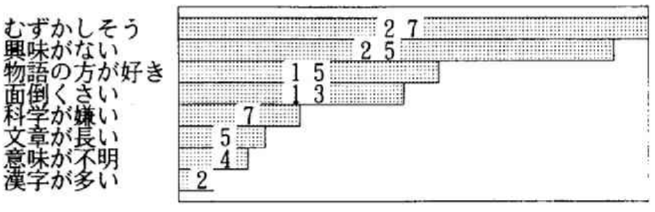
２年「嫌い」の理由

（単位：人数）



６年「嫌い」の理由

（単位：人数）



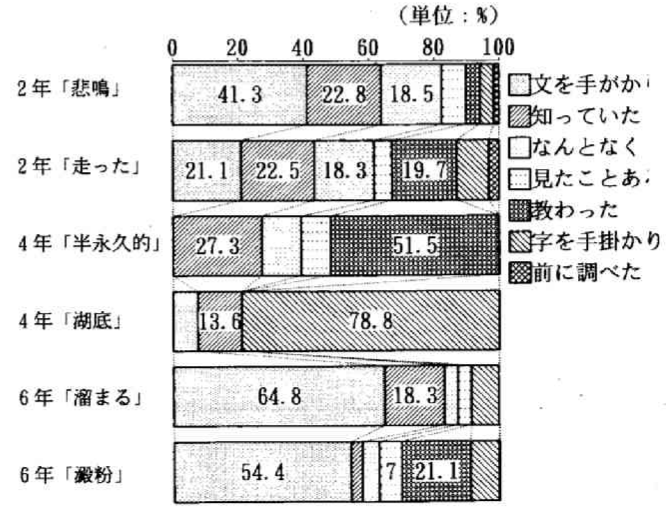
＜質問２＞　漢字の読み方の類推

（引用文中の未習漢字を提示）

提示した漢字の難易度にもよるが，漢字が正しく読めた理由を見ると，低学年でも前後の文脈から判断していることが分かる。高学年では，「見たこと」の経験や字そのものの構成等を手がかりにして類推しようとしている。また，４年の「湖底」は，（みずうみそこ）の読み方ではおかしいと考えた児童もいる。

児童一人一人がこれまでに身に付けた能力や技能，言語感覚などを生かす場を工夫することが大切である。　【図２】

【図２】漢字が正しく読めた理由



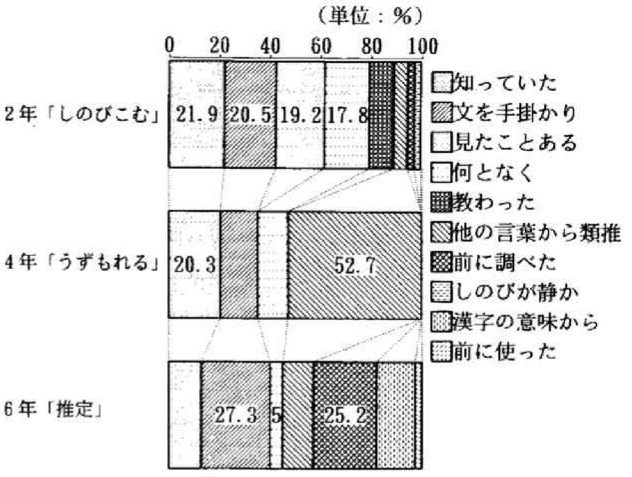
＜質問３＞　漢字・語句の意味の類推

（引用文中の未習漢字・語句を提示）

ここでも，児童は文脈や類似の語句等から類推している。中学年では「他の言葉から類推する」，高学年では「前に調べた・使った」という回答が目立つ。

これらのことから，「言葉は文で，文は文章で指導すること」を大事にするとともに，児童が自ら調べたり使ったりする学習を展開する必要がある。【図３】

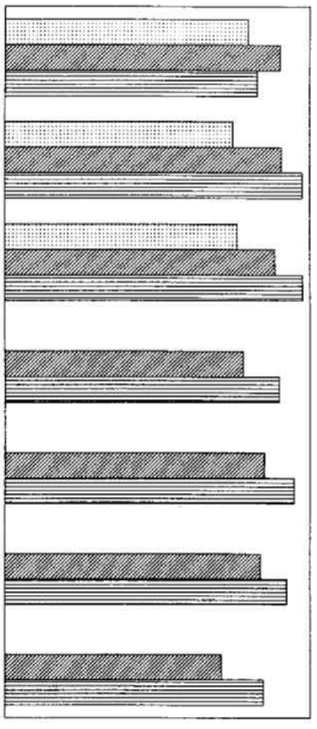
【図３】漢字・語句の意味が分かった理由



【図４】適切な文字による表記

正答率　（単位：％）

空	2年	79.6
	4年	90.2
	6年	82.6
アイスクリーム	2年	74.6
	4年	90.7
	6年	97.5
白い	2年	76.0
	4年	88.4
	6年	97.5
雲	2年	—
	4年	77.8
	6年	89.9
友達	2年	—
	4年	84.9
	6年	94.7
公園	2年	—
	4年	83.6
	6年	92.3
野球	2年	—
	4年	70.7
	6年	84.6



＜質問４＞　既習の漢字・語句の活用

（平仮名文の書き直し）

学習した漢字や片仮名を想起し適切に使うことについては，学年が進むにつれて正答が増える。また，生活に密着している言葉ほど，よく身に付いていることが分かる。

このことから，言語事項を系統的に身に付けるとともに，生活の中で生きた言葉として使う経験を重ねることが大切であると言える。【図４】

＜質問５＞　指示語・接続語の理解

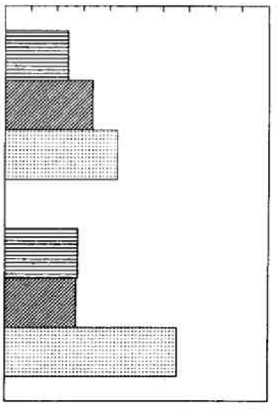
（４年，６年は引用文から回答）

問題の難易度にもよるが，各学年の正答率は，指示語・接続語ともに低い。児童にとって，文と文，段落と段落との意味関係を理解することが困難なことを示している。

また，４年で順接の接続語を考える場合，「そして」を多用する傾向にあることが分かった。接続語の指導に当たっては，特に中学年の指導の在り方を工夫し，関係思考を育てることが大切であると言える。【図５】

【図５】指示語・接続語の理解　（単位：％）

指示語	2年　正答率	24.0
	4年　正答率	33.3
	6年　正答率	42.9
接続語	2年　正答率	27.8
	4年　正答率	27.1
	6年　正答率	65.6



3　言語活動の基礎・基本〔読みの学習における系統〕

	1　　年	2　　年	3　　年
児童の姿	○　易しい読み物を楽しんで読もうとする。 ○　書かれている事柄の大体を読み取ろうとする。	○　いろいろな読み物を読もうとする。 ○　順序や場面の移り変わり等に注意して読み取ろうとする。	○　いろいろな読み物を進んで読もうとする。 ○　文章の構成に即して要点を押さえながら読み取ろうとする。
文字	・語句や文としてまとまりをつけながら平仮名を読む。 ・片仮名で書かれた語句に気づきその大体を読む。 ・漢字に興味をもち、進んで読もうとする。	・片仮名で書かれた語句を読みながら、その使い方を考える。 ・既習や新出の漢字に気づき、正しく読もうとする。	・部首をもとに、漢字の読み方や意味の見当を付ける。 ・片仮名で表記する語句の種類を理解しながら読む。
語句	・読み方や意味の分からない文字や語句を見つける。 ・身近な物の名や事象などを表す語句に関心をもつ。 ・語句の意味や使い方を挿絵などを手掛かりに考える。 ・擬態語や擬声語の役割に気づく ・言葉のリズムを楽しみながら読む。	・反対や対照的な意味を表す語句を身近な事物とのかかわりからとらえる。 ・語句の意味や使い方を挿絵や前後の表現などから考える。 ・比喩や擬態語・擬声語等の役割や使い方をとらえる。 ・響きのよい言葉に親しみ、語感や言葉の使い方をとらえる。	・人の活動や社会の事象などを表す語句を増やそうとする。 ・語句の意味や働きを、文脈に沿って類推したり正しく判断したりする。 ・語句の性質や役割に気をつけながら読む。 ・同音語や同類語等の意味や役割をとらえる。
文	・文の中における主語と述語との照応をとらえる。 ・敬体表現を親しみながら読む。	・文の中の主語と述語との関係をとらえたり、省略された主語を補って読んだりする。 ・文の中における修飾と被修飾の関係に注意して読む。	・文の中の主語と述語との関係をとらえたり、省略された主語を補って読んだりする。 ・文の中における修飾と被修飾の関係をとらえながら読む。
文章	・「だれが」「どうしたか」を考えながら読む。 ・大事な語句や文を見つけ、具体的な事柄を思い描く。	・指示語や接続語、文末表現などに気づき、文の接続を考える。 ・時間を表す語句を手掛かりに、内容のまとまりをとらえる。 ・人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読む。	・指示語や接続語、文末表現などに注意して文の接続や内容のまとまりをとらえる。 ・重要語句や中心となる文を見つけ、要点をとらえる。 ・人物の性格や場面の情景を想像しながら読む。 ・自分の立場から大事な事柄を落とさないで読む。

4　　年	5　　年	6　　年
○　読書の範囲を広げ、考えをもとうとする。 ○　段落相互の関係を考えながら中心点を読み取ろうとする。	○　進んで読書を通して、考えを深めようとする。 ○　文章の主題や要旨を考えながら内容を読み取ろうとする。	○　適切な読み物を選んで読み、考えを深めようとする。 ○　目的や意図に応じて、主題や要旨を読み取ろうとする。
・部首や音・訓をもとに、漢字の読み方や意味の見当を付ける。 ・ローマ字表を使い、ローマ字表記の簡単な語句や文を読む。	・漢字の由来や特質から、読み方や意味を考える。 ・文章の中で漢字が果たしている役割を考えながら読む。	・文字の由来や特質から、語句のの読み方や意味を考える。 ・現代文における漢字の役割を理解して、既習や新出の漢字を正しく読んだり、身の回りの漢字に興味をもったりする。
・理解するために必要な文字や語句を辞書を使って調べる。 ・語句の意味や働きを、文脈に沿って類推したり正しく判断したりする。 ・様々な意味の中から事象に即した意味を選びだす。 ・複合語を指摘し、その構成から意味をとらえる。	・理解するために必要な文字や語句を辞書を使って調べる。 ・語句の意味や働きを、既習の語句と比べたり前後の文脈からとらえたりする。 ・語句の意味を、語句の組立方や種類からとらえる。 ・語感、言葉の使い方に対する感覚をとらえながら読む。	・理解するために必要な文字や語句を辞書を使って調べる。 ・語句の意味や働きを、既習の語句と比べたり前後の文脈からとらえたりする。 ・助詞や助動詞の働きをとらえながら読む。 ・語感、言葉の使い方に対する感覚をとらえながら読む。
・文の構成を修飾・被修飾の関係からとらえる。 ・文の意味を５Ｗ１Ｈからとらえる。	・文の中での語句相互の関係をとらえる。 ・重文、複文、体言止め、倒置法などの文の構成をとらえる。	・重文、複文、体言止め、倒置法などの文の構成をとらえる。
・指示語や接続語、文末表現などに注意して段落と文章全体との関係をとらえる。 ・中心的事柄とその他の事柄を指摘し、文章の内容を要約する。 ・人物の気持ちや場面の変化を想像しながら読む。 ・読む目的や必要に応じて大事な事柄に注意しながら読む。	・指示語や接続語、文末表現などに注意して段落と文章全体との関係をとらえる。 ・意味段落の要点や文章構成から主題や要旨を考えながら読む。 ・心情や情景の叙述や描写を味わいながら読む。 ・自分の立場から必要な事柄を探しながら読む。	・頭括型、尾括型などの文章の構成や表現の仕方に注意しながら内容をとらえる。 ・目的や文章の種類や形態などに応じた方法で読み進める。 ・事象と筆者の感想、意見とを区別しながら読む。 ・自分の考えを深めたり、優れた叙述を味わったりして読む。

Ⅲ　実践事例

1　読解単元における学習指導

第２学年　　言葉の働きに気づき，楽しんで使う

(1)　教材名　「力太郎」

(2)　研究主題と教材との関連

本教材は，語り口としての方言を生かしながら，昔話らしい言い方，様子を表す的確でおもしろい表現を多用した楽しい作品である。特に力太郎の活躍を力動感あふれるものにしている擬態語・擬声語や，物語に活気を与え，スケールを大きくしている繰り返し表現・比喩・誇張表現等は，児童に言葉のおもしろさ，楽しさをとらえさせるとともに，作品の中に使われていることのよさを気づかせるのにふさわしい。この特色を生かし，学習シートを用いて言葉に着目して読み進め，話し合いの中で，板書を手がかりにしながら，一つの言葉から，あるいは言葉と言葉が関係し合って豊かにイメージを広げられることをつかむ。そして，学習した言葉の中から，児童自身が心に残った言葉・表現に生かしていきたい言葉を「言葉の貯金」として蓄える。さらに，これらの言葉を日常活動や終末の「○○太郎」のお話作りの中に生かしていくことで，言葉は生きて働く力となって，児童の中に定着していくものと考える。

(3)　指導の概要　（全１３時間・本時６／13　※印）

時	主な学習活動	主題に迫るための具体的な手だて
第一次(3)	・範読を聞き，感想を書く ・場面分けをして，話の筋をつかむ。 ・学習のめあてをつかむ。	・時や事柄の順序を表す言葉に着目して粗筋をつかむ。 ・言葉に関心をもつことができるよう，言葉の貯金を増やすこと，貯金した言葉を生かして「○○太郎」のお話作りをするためのめあてを持つようにする。
第二次(7)	・場面ごとに，様子や人物の気持ちを考えながら読む。 ・言葉を貯金する。 ※本時は，力太郎がみどうっこ太郎と出会い，力比べをする場面	・めあてにそって読み進める過程で，言葉の働きに気づくことができるようにするために，言葉の欄を設けた学習シートを使う。 ・めあてについて話し合う中で言葉の働きやよさ，おもしろさに気づくことができるようにする。 ・言葉の働きを押さえ，その言葉の特色・性質に合った名前を児童が付け，関心・意欲をもつことができるようにする。 ・心に残った言葉，おもしろい言葉，使ってみたい言葉を蓄え，活用することができるようにする。
第三次(3)	・「○○太郎」の活躍する簡単なお話を作る。 ・お話を紹介し合う。	・身に付けた言葉を自分の表現に生かして作るようにする。 ・友達の良い表現に気づき，今後の自分の表現に取り入れるようにする。

(4) 本時の指導（6／13時）

①目　標　　力太郎がみどうっこ太郎を降参させるまでの様子を，力太郎の強さとやさしさを表す言葉に着目し，想像することで読み取ることができる。

②展　開　　ア：言葉に対する関心・意欲・態度　　イ：言葉に関する知識・理解・技能
ウ：個々の既有の表現や理解の能力

学　習　活　動	言語活動の基礎・基本	支　援　と　評　価
1. 前時を思い出す。 2. 学習範囲を知る。 3. めあてをつかむ。	ア：貯金した言葉を思い出す。 イ：学習範囲を正しく読む。	・カードに着目させる。 ・掲示を活用する。
みどうっこ太郎をやっつけた力太郎のすごいところを見つけよう。		
4. 力太郎のすごいところを見つける。 5. 吹き出しに書いたことを発表し，話し合う。	イ：言葉に着目し，力太郎のすごいところを吹き出しに書く。 イ：友達の発表をよく聞いて言葉の働きやよさ，おもしろさを知る。 ウ：既習の言葉の働きを生かして話し合う。 イ：聞いている人にきちんと届く声で気持ちをこめて発表する	・言葉の欄を設けたワークシートを用意する。 ・めあてについて話し合う中で板書を工夫し，言葉の働きやよさ，おもしろさに気づくことができるようにする。 ○言葉を手がかりとしたか ・言葉の働きごとに児童が名前を付け，関心・意欲をもつようにする。
6. 工夫して音読する。	イ：話し合われたことを生かして相手や場面に応じた音読を工夫する。	・よい点を認め，励まし，次の学習へ意欲が継続するように配慮する。
7. 言葉を貯金する。	ア：心に残った言葉，大切な言葉，使ってみたい言葉を蓄え，活用することができるようにする。	・板書を手がかりにして着目した言葉を貯金に入れるように声かけをする。

(5) 考　察

低学年分科会では，分科会研究主題「言葉の働きに気づき，楽しんで使う学習活動の工夫」に迫るための手だてとして，「言葉の働きに気づく学習活動　ア．音声化　イ．学習シート　ウ．話し合い　エ．動作化　オ．言葉の命名（言葉の働きを押さえ，言葉の特色・性質に合った名前を児童が考えて付ける活動）　カ．言葉の貯金（心に残った言葉・使ってみたい言葉を言葉貯金としてカードに書き，蓄え，それらの言葉を作文や日常生活の中で意図的に使う活動）キ．巻き物作り（読みのために，意図的に使わせたい言葉や読みの手法を学級の中での共有のものとして増やしていく活動）　ク．終末活動」を考え，取り組んできた。

① 学習シート

言葉の働きに気づくことができるようにするために，言葉の欄を設けたシートを2種類作った。一つは，学習シートを上下の二段に構成し，下に言葉の欄を作り，絶えず，どの言葉から気持ちが想像できたのかを意識して書くことができるようにしたもの，もう一つは言葉の欄に本文を載せ，読み取りのうえで手がかりになる言葉を空欄にしたものである。これらのシートは，児童が言葉の働きに気づくことに効果的であった。また，シートを2種類用意したことで，誰もが無理なく自分の力に合った方法で学習を進めることができるようになった。今後は，自分の力に合った適切なものが選べるようにするための個に応じた支援が一層大切になっていくものと思われる。

② 話し合い活動

想像した気持ちを発表し，どの言葉からそう思ったのかを話し合いで深めていった。教師は発言を学習シートと同様に上下二段にして板書し，言葉を手がかりに気持ちが想像できることを視覚的にとらえさせるよう工夫した。同じ言葉から様々な気持ちが想像できることや，言葉と言葉が関連し合ってイメージが広がることなど，言葉の働きに気づくうえで効果的であった。しかし，言葉を一つ一つ大切にしていくとどうしても時間がかかってしまうため，話し合いの中で押さえる言葉は，精選し，焦点化していくことが必要である。一つの言葉から想像を広げて読む力を身に付けていくことで，それを既有の力として生かしながら，物語のおもしろさを一層味わうことのできる児童へと変容していくものと考える。

③ 言葉の命名・巻き物作り

言葉の命名や巻き物作りの活動は，児童が自分で言語環境を作っていくことでもあり，言葉に関心をもつうえで効果的な方法であると言える。これらを教室に掲示していくことで，前に学習したことが生かされたり，新しく学習したことが増えていったりすることから，児童は学習に主体的にかかわっていけるようになる。

④ 言葉の貯金

貯金した言葉は，作文や日常生活（日記やスピーチ）の中で意図的に使うことができるように支援してきた。児童は「言葉を使えてよかった」「勉強した言葉が使えた」「言葉を勉強してよかった」という成就感・満足感を味わうことで，更に言葉への興味・関心を高めることができた。低学年の児童にとって，この言葉の貯金という方法は非常に有効であると言える。

第３学年　　説明的文章の読みを通して，言葉の意味や働きをとらえ活用する

(1)　教材名　「ヤドカリのすみかえ」「ありの行列」

(2)　研究主題と教材との関連

二つの教材は，接続語や指示語，順序を表す言葉，理科的な言葉を適切に用い，「問題提起－観察・実験－結論」と児童に分かりやすく展開されており，３年生が，言葉に対する興味・関心を高めながら，初めて要点学習をするために適切な教材であると言える。

そこで，このような文章の特色を生かし，一つ一つの言葉に着目しながら読み進めていく活動や，着目した言葉を活用する場を工夫することにより，中学年のテーマに迫ることができると考えた。そのため，単元全体の学習課題を「言葉のクイズ大会をしよう」と設定し，学習意欲を高めることにした。読みを深める過程では，言葉の意味を明確にとらえるために，大切な言葉に印をつけ，接続語を手がかりにして，読み取ったことを「コマ漫画」に表す活動を取り入れてみた。まとめでは，言葉に着目し，自分の言葉を広げることができるようにするため，言葉のクイズ大会をし，大切な言葉を様々な表現方法で説明することにした。また，ここで獲得した言葉を活用して，短文を作る場を設けるとともに，着目した言葉をカード化し，「言葉の引き出し」として，日常的に活用できるようにした。

(3)　指導の概要（全１４時間・本時13／14）

時	主な学習活動	主題に迫るための具体的な手だて（・支援○評価）
1 〜 5	・「ヤドカリのすみかえ」の学習のめあてや計画を立てる。 ・要点のまとめ方を理解し，段落ごとに読み深める。 ・言葉のクイズをする。	・語句に着目するために，大事な言葉に印をつけ，読み取った内容をコマ漫画に表すようにする。 ○叙述に即して答えを考えられたか。 ○言葉の意味や働きが分かり，楽しんで短文作りができたか。（発言・作品・表情から）
6 〜 10	・「ヤドカリのすみかえ」と比べながら，「ありの行列」を読み，感想を書く。 ・学習のめあてや計画を立てる ・段落ごとに要点を読み取る。	・語句に着目するために，大事な言葉に印をつける ・接続語や指示語，細部を読み取るために，内容をコマ漫画に表すようにする。 ○言葉を手がかりにしたコマ漫画を書き表すことができたか。（作品から） ・自分の言葉を増やすために大事な言葉をカード化する。「言葉の引き出し」
11 〜 14	・出題語句を調べ，問題文を考える。 ・言葉のクイズ大会をする。 （本時）	・大事な言葉の意味や働きに着目するために，叙述に即して問題文と解答に含まれる言葉の説明を考えるようにする。 ○叙述に即して答えを考えられたか。 ○楽しんでクイズ大会をし，言葉の意味や働きが分かり，進んで短文作りができたか。（発言・作品・表情から）

(4) 本時の指導（13／14時）

①目　標　　言葉のクイズ大会を楽しみ，その中の言葉を使って短文を作ることができる。

②展　開　　ア：言葉に対する関心・意欲・態度　イ：言葉に関する知識・理解・技能

ウ：個々の既有の表現や理解の能力

学習活動	言語活動の基礎・基本	支　援　と　評　価
1. 前回までの学習を想起し，本時のめあてを持つ。	ア：学習してきた力を発揮して言葉に着目したクイズ大会を楽しもうとする。	・児童の意欲を高めるために，本時のめあてを掲示する。
言葉のクイズ大会をして，好きな言葉を選んで短文作りをしよう。		
2. 「ありの行列」を，読み合う。	ア：楽しんでクイズを出題したり解答したりする。	・単元で学習したことを想起しながら聞くように助言する。
3. クイズ大会をする。	イ：前時に準備した説明カードを使って，聞いている人に分かりやすく説明する。 イ：出題に対して最も適切な解答を本文から見つけ出す。（指示語や接続語を手がかりにする）	・プログラムやきまりを掲示しておき，主体的にクイズ大会が進行できるようにする。 ○調べた言葉を分かりやすく説明することができたか。（発表より） ○叙述を基に，最も適切な答えを見つけられたか。（態度・発言より）
4. クイズ大会の解答で説明された言葉を使って短文を作る。	ア・イ・ウ：説明された言葉を適切に使い，進んで短文を作る。	・意欲的に短文作りに取り組めるよう，言葉ごとに色別カードを用意しておく。 ・言葉の意味を正しくとらえられるよう，児童が発表した説明カードを掲示しておく。 ○適切な短文作りができたか。（カードより）
5. 短文を発表し合う。	ア：友達の作った短文と自分の短文を比べながら聞く。 イ：短文の中で，選んだ言葉が適切に使われているかどうかを考える。	・選んだ言葉が適切に使われていない場合は気づくように助言する。 ○友達の発表を興味をもって聞き，言葉の使い方が適切であるかを判断できたか。（表情・発言より）
6. 次時の学習予定を知る。	ア：本時の学習の経験から，次時はより良い発表や短文作りをしようとする。	・本時の良かった所を賞賛し，次時の発表を励ます。

(5) 考　察

主題に迫るための指導法の工夫は，次のとおりである。

① 単元の学習過程の工夫

・ 学習のめあてや学習計画を明らかにする。【つかむ】

・ 読みを深める【調べる・深める】

・ 学習の内容をまとめる【まとめる】

・ 学習したことを活用する【表現に生かす・活用する】という流れである。

児童は，単元の学習を進める必然性や見通しをしっかり持つことで意欲的に学ぶことができる。本単元でも，クイズ作りをする活動を目指して主体的に読み進める児童が多かった。また，教室に，今，どの段階の学習をしているかを明示しておくことも大切であることが分かった。

② 身に付け活用する場の工夫

言葉の働きに着目し，身に付けるための活動として「コマ漫画」を描いた。この活動は，次の点で有効だった。

・絵に表現する活動なので，児童は興味をもって取り組んだ。

・順序や場面の変換をとらえる手がかりとして，接続語に着目することができた。

・内容の細部まで絵に表現しようとするため，本文を読み深める活動がより主体的になった。

・文末などの表現を大切にして読み，その意味を正確に読もうとするようになった。

絵を描くことが苦手な児童には，その子なりの表現を認めることが必要である。

③ 学習したことを活用する場の工夫

「言葉のクイズ大会」では，

・単元の最終のめあてが明確になっていたため，言葉に着目する意欲が持続された。

・単元を通して，言葉を正しく理解しようとする意欲が見られた。

・要点をまとめるときに使った語句を，クイズ大会の出題語句とした児童が多かったので，言葉の意味や働きに着目するようになった。

さらに，「短文作り」では，

・身の回りの出来事を，新しく学習した言葉を使って生き生きと表現できた。

・友達が作った文を聞き合うことで，語句の使い方の正誤を判断する力を身に付けつつある。

④ 日常的に，言葉に注意して活用する力を育てる工夫

言葉をカードに書いて，各自が集積しておき，日記やスピーチに使うようにした。児童は楽しみながら，言葉集めをしたり活用したりしている。

《今後の課題》

○学習材の工夫……児童が作成した漢字カードで，文字の成り立ちや使い方の学習を進めると生き生きとした活動が展開されたことから，さらに，場に適した学習材を開発していくこと。

○年間計画の充実…言語活動の基礎・基本を定着させるために，説明的文章教材の指導系統表に基づいた多様な活動を位置付けること。

○個に応じた支援…一人一人の言語能力を伸ばすために，変容を追い続け，支援の方法を明確に持つこと。

第６学年　　**読みの過程で言葉の大切さに気づき，進んで活用する**

(1)　教材名　　「太陽のめぐみ」「オゾンがこわれる」

(2)　研究主題と教材との関連

「太陽のめぐみ」は段落構成が明確で分かりやすい文章である。各段落をつなぐ「しかし」「では」等の接続語や指示語の働き，具体例の挙げ方，文末表現など，これまで学習した言語事項を生かして読んだり，再確認しながら読んだりする学習に適していると言える。さらに，このような学習を展開していく中で，言葉の大切さに気づいたり，言葉の学習の必要性を実感したりすることができるものと考える。

「オゾンがこわれる」は，「太陽のめぐみ」と内容的に関連しているだけでなく，接続語や指示語，文末表現，具体例の挙げ方などの言語事項についても関連が深い，そこで，「太陽のめぐみ」で学習した言葉の働きや役割などを生かして自力で学習を進めることができるよう，説明文の読解学習の手がかりとなる言語事項を「ガイドブック」にまとめ，それを参考にして読むなどの活動を工夫した。学習したことを読む活動に生かすことが，更に言葉の学習への意欲につながるものと思われる。

(3)　指導の概要（全１３時間・本時９／13　※印）

時	主な学習活動	主題に迫るための具体的な手だて
第一次(4)	・説明文読解の手がかりになる言語事項について話し合いガイドブックにメモする ・ガイドブックを参考に「太陽のめぐみ」を読み，学習シートにまとめる。	・「太陽のめぐみ」をもとに，これまでに学習した言語事項を想起する。（接続語，指示語，文末表現，文章構成など） ・それぞれの言語事項の働きや役割について，ガイドブックにまとめる。 ・ガイドブックを参考にして読み取るよう助言する。
第二次(7)	・ガイドブックを参考に「オゾンがこわれる」を読み取り，学習シートにまとめる ・友達の読みと比べたり，足りないところを付け加えたりする。 ※本時は，フロンガスの二面性を述べた段落（⑧～⑪段落）	・「太陽のめぐみ」で学習した言語の働きや役割を考えながら「オゾンがこわれる」を読み取るようにする。（ガイドブックを参考にする。） ・ガイドブックに新しい言語事項を付け加えたり，既習の言語事項の別の働きを書き足したりする。 ・机上に国語辞典を常備しておき，すぐ使えるようにする。 ・言語事項を根拠に，課題について話し合う。
第三次(2)	・テーマを決め，事実をもとに簡単な説明文を書く。	・文末表現に気をつけて書くよう助言する。 ・必要に応じて，ガイドブックを振り返るよう助言する。 ・説明文の簡単な構成の例を表示しておく。 ・文末表現，接続語，文章構成など「太陽のめぐみ」「オゾンがこわれる」で学習したことを効果的に使って書く

(4) 本時の指導（9／13時）

①目　標　　言葉に着目し読み取ったことをもとに自分なりの表現でまとめることができる。

②展　開　　ア：言葉に対する関心・意欲・態度　イ：言葉に対する知識・理解・技能

ウ：個々の既有の表現や理解の能力

学習活動	言語活動の基礎・基本	支援と評価
1. 本時の学習課題を確認する。	ア：「フロンのいい点と悪い点は何か。」を，言語事項に注意しながら読み進めようとする。	・見通しを持って取り組めるよう本時の学習予定を確認する。
2. 第2段落から読み取ったことを学習シートにまとめる。	イ：接続語や重要語句，文末表現などを手がかりにまとめる。 ・フロンガスは現代生活になくてはならないもの。 例えば　冷蔵庫，クーラー ・フロンガスは理想的な物質。熱に強い，燃えない，しかも害を与えない。 ところが　おそろしいきば ・「安定している」ためそのまま上昇し，紫外線にぶつかり分解。塩素がオゾンをこわす。 アウ：難しい語句や意味のよく分からない言葉は辞書を引く。	・学習活動の進まない児童にはガイドブックを見たり，これまでの学習を振り返り重要語句を選んだりするよう助言する。 ・課題把握が不十分な児童にはオゾンとフロンガスの関係をまとめるとよいことを助言する。 ・言い換えの言葉や文末表現に注目するとよいことを助言する。 ・国語辞典を常備しておく。 ・言葉に抵抗のある児童には，言葉のコーナーを活用するように助言する。
3. 読み取ったことを全体で話し合い課題を解決する。	イウ：本文の言葉を根拠に，既習の言葉の学習を想起しながら話し合う。	○言葉に着目して読み取ったことをまとめることができたか。 ・発言を板書しながら，課題の解決につなげる。
4. 学習シートにまとめたことを確認したり，読み誤ったところを修正したりする。	イウ：接続語や指示語を押さえてまとめていたか確認する。 イウ：重要語句を中心にまとめていたか確認する。	○言葉を根拠に話し合うことができたか。
5. 本時の学習を振り返り，感想を書く。	アイウ：友達の発言や，読み取った内容，表現，筆者の意見に関する自分の考えをまとめる。	○学習内容や言葉に着目して読むことの大切さについてまとめることができたか。

(5) 考　察

本分科会では，読みの過程に言語事項や既習内容を整理したりまとめたりする活動を位置付け，児童が言葉の大切さや学習の必要性を実感できるように工夫した。

① ガイドブックの作成

内容が正確に読み取れなかった児童のなかに，「接続語や指示語に注意して読むと内容がよく分かるようになってきた」などの感想を述べる児童が増えてきた。ガイドブックを手にして読み進めることが，言葉に着目して読むことの必要性を児童に意識させることにつながったものと思われる。また，ガイドブックの効果として，どのような言葉に注目して読み進めるとよいかという手がかりにすることができること，学習した内容を整理し身に付けることができること，自分なりのガイドブックを作成することで学習に対する達成感や満足感を味わうことができること，などをとらえることができた。

② 単元の構成

「太陽のめぐみ」では，説明文を読むときの手がかりとなる言語事項の学習を主に一斉指導で行い，「オゾンがこわれる」では，身に付けた内容を活用しながら自らの力で読み進める展開とした。「オゾンがこわれる」の学習の中で，児童は「太陽のめぐみ」で学習したことを例に挙げながら，文章構成の工夫や言葉の働きや役割について話し合う場面が見られた。既習事項を活用するためには，二つの類似する教材文で連続した単元を構成することが効果的であることが分かった。

第6学年　説明的文章の読みを通して，言葉の働きに着目し活用する

(1) 教材名　「長屋王木簡の発見」

(2) 研究主題と教材との関連

本教材は，筆者が平城京内の屋敷跡の発掘の折，一枚の木簡を発見したときの感動から始まる。それを五段落の結論へと結び付けて，筆者の感動がより強く読み手に伝わるように構成を工夫している。ここでは言葉の使い方や文章の展開で工夫している点に気づかせ，筆者の思いや感動がどのように述べられているかを学習することができると考えた。

説明文の読み取りでは，接続語・指示語・修飾語などとともに，文章の中で対比される言葉，軽重関係にある言葉，二重の意味を持つ言葉などの働きに着目することで，理解が深まり，論理的に考える力が育つと考える。また，言葉の働きに着目することのおもしろさ，大切さに気づくことで，考えをまとめたり再構成したりする場において，学んだ言葉の働きを生かせるものと考える。児童は，楽しんで取り組む気持ちを持続し，満足感を実感する学習の過程で自己評価・相互評価を繰り返し行うことで，正しく読み取る力，論理的に考えを深める力，課題を追究する力，思いや考えを豊かに表現できる力を伸ばしていくものと考える。

(3) 指導の概要　（全7時間・本時4／7　※印）

時	主な学習活動	主題に迫るための具体的な手だて
1	・第一段落から学習課題を作る。	・要点に迫ろうとする課題作りとなるようにする。
2	・学習計画を立て学習方法を知る。	・言葉に着目して学習する意識をもつように促す。

	・第一段落から，筆者の感動を細かく読み取る。	・学習シートを使って読み進める方法を確認し，個人で読み進められるようにする。
3 4 ※ 5	・第二段落から発掘や木簡の意味を読み取る。 ・第三段落から今回の木簡発見の重要性を読み取る。 ・第四段落から今回の発掘で分かったことを読み取る。	・適切なめあて作りのための個別指導をする。 ・自分の学習シートの書き込みを是正しながら読んだり書いたりするように助言する。 ・表現の工夫や要点についての理解を深めるために言葉の働きに着目した言葉の関係図を作らせる。 ・読みの力を支える言葉の働きを明確にする。
6 7	・第五段落から筆者の思いや考えを読み取る。 ・要旨をまとめる。 ・文章構成の工夫など文章全体の表現の工夫についてまとめる。 ・発掘の仕事に対する考えを書く	・完成した学習シートを基に展開の工夫や筆者のものの考え方をつかむようにする。 ・言葉のつながりから，構成の工夫をとらえる。 ・発掘の仕事に対する筆者の考えをとらえて要旨をまとめ，自分の考えを書いて，言葉の働きを生かす場にする。

(4) 本時の指導　（4／7時）

①目　標　・筆者が表現を工夫している点をとらえ，木簡発見の重要性を読み取り，文章の中での言葉の持つ意味や働きに気づくことができる。
・読み取った内容を自分なりの方法で書き表すことができる。
・自分の読みを評価しながら，めあてを追究することができる。

②展　開　ア：言葉に対する関心・意欲・態度　イ：言葉に関する知識・理解・技能
ウ：個々の既有の表現や理解の能力

学　習　活　動	言語活動の基礎・基本	支　援　と　評　価
1.　本文を読み返し，今までの学習を思い出す（個人） 2.　第三段落を読み深める。 ・音読（黙読）する。 ・本文を読み，直観的に要点をとらえて，それにかかわる読みのめあてを作る。	例　今回の木簡発見の持つ重要性は何か。また，それがどう表現されているか。 ア：要点を読み取ろうとする。 ウ：自分の直観的な読み取りからめあてを作る。	・前時までの学習について自己評価する場を設ける ・学習シートで見通しを持つ。 ○要点にかかわる読みのめあてとなっているか。
・本文を読み，言葉の働きに着目して重要な言葉を選ぶ ・選んだ言葉を言葉の関係図に表す。　（個人）	イ：強調表現やたとえに気づく イ：対比して取り上げている言葉やつながりをとらえる。 ア：自分の読みを評価する。	・診断的調査を生かして，重要な意味を持つ言葉に気づくよう助言する。
3.　言葉の関係図を基に選んだ重要語句が適切か話し合う。また，表現や構成の工夫についても話し合う。	ウ：各自が関係図を説明する。 ア：適否を話し合い，よい意見は取り入れようとする。 イ：言葉の関係図を修正する。	・分かりやすい関係図になるように助言する。 ○自分の考えを言葉の働きに着目して，論理的に説

（グループ） 4.　3までの学習を基に読み取ったことをまとめる。 （個人） 5.　学習のまとめと自分の考えを発表する。　（全体）	イ：表現や構成の工夫に気づく ウ：めあてのまとめとして，要点を正しくとらえる。 イ：言葉の働きに着目することがめあての解決につながることを理解する。	明できたか。 ・自分の読み取りについて自己評価する場を設ける ・着目すべき言葉の関係を明確にする。

(5)　考　察

①　児童の興味・関心を引く教材

歴史的な内容に関心の高まる時期である。その意味から本教材は，児童にとって学習意欲が喚起される興味深いものであると言える。児童は，「木簡」を「ごみ」と言い「宝石」とも言うたとえの表現の落差をおもしろがった。

②　評価の工夫

児童が，めあてに向けて学習の方法や内容を自己評価しながら読みを深めたり，言葉の力を高めたりすることができるような学習シートを作成し，用いたことは有効であった。

本単元の事前に言語活動の基礎・基本に関する診断的な調査を行い，個別指導の資料とした。また，学習後に再度調査を行ったので，本単元で身に付けた力を把握することができた。

③　学習形態の工夫

めあてを作る・重要な言葉を選びその働きを考える・学習を振り返り自分の考えを深める場面では，個別学習を中心に行う。その個別学習の間に，グループでの話し合い活動や全体での発表の場を設けるようにした。これにより，個別学習を相互評価したり，充実したりすることができた。グループ学習では，メンバー構成について工夫が更に必要であるが，今まで気づかなかった言葉の働きに着目するなど関係把握の視点に広がりを持つことができた。

④　学習過程・学習活動の工夫

学習全体を通じて学習シートを用い，一人読みが充実することを考えた。各自がめあてを持ち読み進める上で，文中の言葉の働きに着目してめあての適否を考え，必要ならば修正をしながら，言葉の関係図などを書いて読み進める。その後，再考した自分のめあてについてまとめ，考えを深めるようにした。児童は，これまでに共通のめあてで読み深める学習経験をしている。これを生かして，各自が個別のめあてで読み深めることにより，主体的に学習をすることができた。また，それを繰り返すことにより，より適切なめあてが立てられるようになった。言葉の働きを生かして直観的にとらえる力が伸びたと言える。児童もこのことを実感して学習の意欲が高まっていった。

⑤　説明的文章における言葉の働き

細かく分析することで，読み取りを通して身に付けさせる力を把握することができた。児童は，言葉の働きを考えることで，漠然ととらえていたものを明確にしようとしたために今までに気がつかなかった言葉の持つ働きの重要性に気づいて感動することができた。また，一文字と言えどもおろそかにはできないと感じることもできた。

2　特設単元による学習指導

第５学年　　**言葉への関心をもち，意欲的に活用する**　　（敬語の指導）

(1)　単元名　「心を言葉に」

(2)　研究主題と単元との関連

現在の児童は，言葉を使わなくても用件を済ますことができるような状況にある。そのような児童にとって敬語は，あらたまった言葉であり，なじみの薄いものであると言える。日常生活の中で使う場面が少ないため，あらためて敬語を使って話をしようとすると，堅苦しくぎこちなくなってしまうことが多い。

しかし，ていねいな言い方で語りかけられると心が和んだり，敬語を使って話をすると謙虚な気持ちになったりする。敬語の美しさは相手を敬う気持ちから生まれるところにある。

そこで「心を言葉に」という単元を設定し，敬語の意味や使い方について学習することにより，言葉への関心を高め，言語生活を豊かにして欲しいと考えた。さらに，日常生活の中でも敬語を使うことができるよう，単元の後半に生活実践の場を工夫することにした。

(3)　指導の概要　（全６時間・本時４／６　※印）　□は自己・相互評価の場面

時	主な学習活動	主題に迫るための具体的な手だて
1	・商店街の人たちと正しい敬語で話ができるようになろうというめあてを持つ。 ・録音テープから敬語表現を見つけ，普段の言葉と比べる。 ・敬語の使い方を練習する。	・敬語を正しく使った話し方に注意を向ける。 ・誰と誰の会話か ・どんな場面か ・言葉遣いはどうか ・本時の学習について感想を書くための視点を示す ・調べ方や資料について紹介する。
2	・ほかの敬語について調べる。	・家庭学習
3	・敬語を分類整理することを通して，丁寧語・尊敬語・謙譲語や使い方の違いに気づく。 ・疑問点について話し合い，正しい使い方を理解する。 ・分類整理した敬語を「敬語アイテム集」にまとめる。 ・敬語の使い方の練習をする。 ・商店街での会話を想定してワークシートに書く。 ・敬語が正しく使えているか，工夫した方がよい所はないか	・集めた敬語を分類整理するための工夫をする。 ・敬語の仕組みの図式化　・カードの色分け ・ＶＴＲの活用　・板書用カード ・敬語集のネーミングを工夫し意欲を高める。 ・２～６人で人数を変えて使うことにより，想定を工夫できるようにする。 ・いろいろな状況のヒントを与える。 ・品切れ　・不良品　・お金の不足　・ばら売り ・おまけ　・交換　・釣銭の過不足 ・全員が活動するために，一言でも担当するようにアドバイスする。 ・自分たちが作った「敬語アイテム集」を活用する

	をグループで話し合う。	ことにより満足感や充実感を味わえるようにする ・他の発表が分かるように板書を工夫する。
4 ※	・グループごとに想定した会話を発表し，敬語の使い方について話し合う。	・間違いを恐れず楽しく発表するように励ます。 ・場面の状況や使い方についても考え，正誤にとらわれ過ぎないよう助言する。
5	・ビビ通り商店街に出かけ，敬語を使って買物をする。	・実際に相手や場に応じて敬語を進んで活用できるように励ます。
6	・これからの課題などについて話し合い，まとめる。 ・今後の自分への課題を含めた感想を書く。	・厳密な正誤判断ではなく，心を言葉に表していることを認める。 ・みんなの発言から適切で優れた点を探し，日常生活に生かすことができるよう助言する。

(4) 本時の指導（4／6時）

①目　標　・想定した買物の場面に応じて作った“敬語を使った会話”の発表に意欲的に取り組むことができる。

・グループの発表を聞き，敬語の適切な使い方や敬語の大切さ（心を言葉に）を理解することができる。

②展　開　ア：言葉に対する関心・意欲・態度　イ：言葉に関する知識・理解・技能

ウ：個々の既有の表現や理解の能力

学習活動	言語活動の基礎・基本	支　援　と　評　価
1.　前時に作った買物の会話例の発表会をするという目的を持つ。	ア：他の発表と比べて自分の敬語使用をよくしようとする。 ウ：これまでの発表経験を想定して，話し方・聞き方・発表の進め方に生かす。	・各グループの優れている点を暗示して，他の発表に対する関心や自分たちの発表に対する意欲を喚起する。 ・学習の目的や必要性について再度確認しながら，本時のめあてが明確になるようにする。
買物の場面を想定した会話の発表会をしよう		○自分たちの発表をしっかりやろうとする積極的な行動が見られたか。
2.　作成した会話をグループ内で読み合い自分の役割を確認する。 3.　グループの	ア：自分の担当の敬語が適切かどうか確認しようとする。 イ：相手や場面に応じた敬語の使い方を工夫する。 ア：他の発表を聞いていろいろな使用場面や使用例を知ろうと	・各グループを回ってそのグループの会話例の良い点をあげて発表意欲を引き出す。 ・各グループの発表で児童が気づかなかった良い点を認めて励まし，次の学習へも意欲が続くようにする。

発表をして気づいたことを話し合う。	する。 イ：聞く人に届く声，明瞭な話し方に注意して発表する。 ウ：学級会や他教科の経験を生かして，望ましい話し方や聞き方で話し合う。	・同じ動作についていくつかの違う敬語が使われていることに気づくように，各グループの発表を掲示する。 ・正誤ではなく，心を言葉に表すことの大切さに気づくようにする。
4. 本時の学習について感想を書く。	ア：本時を振り返り，次時への意欲をもつ。	・自己評価をし，次への課題が持てるようにする。

③評　価

・他のグループの発表を参考にしたり，担当部分を見直したりして取り組んだか。

・正誤ばかりでなく，心が伝わるかについて話し合ったか。

(5) 考　察

授業実践に当たり，研究主題を実現するために次の6点を工夫した。その工夫の成果と課題について以下に述べる。

① 教材の工夫

○録音テープ……児童の言葉遣いに対する商店街の人の意見を聞かせたことは，児童の関心や意欲を引き出すことにつながった。

○ビデオテープ……どんな場面ではどんな敬語の使い方が望ましいのか具体的に理解できた。しかし，市販の物に頼らず学級の実態を考慮して開発していく必要がある。

② 場の工夫……学習したことを活用するために，商店街という場を学習の中に設定したことは，児童の目的意識を明確にすることに役立った。

③ 学習活動の工夫…アイテム集作りは，商店街での体験活動に生かされ，学習意欲の持続に役立った。

④ 学習過程の工夫…「動機付け」では，学習への関心や意欲が高まった。
「身に付ける」では，敬語の基礎・基本を身に付けることができた。
「活用する」では，商店街での体験活動により成就感がもてた。

⑤ 学習形態の工夫…個・グループ・全体ごとに，どのような活動が有効かを考慮したため，目的のはっきりした活動ができた。（例：個では書く活動，グループでは対話練習，全体では意見交流）

⑥ 評価の工夫……児童の考えや感想を授業展開に生かすために，感想を中心とした自己評価・相互評価を取り入れた。課題としては，評価の目的や評価の対象によって評価方法を工夫すること，評価基準を明確にして児童の評価を支えることなどについての研究が必要である。

Ⅳ　研究の成果と課題

本研究では，国語科の基礎的・基本的な内容を“新しい学力観”の視点からとらえ直し，それを「言語活動の基礎・基本」として学習指導に定位することにより，児童の学習に対する主体性とより確かな言語能力の育成を目指してきた。読解単元や特設単元における授業の検証を通して，次のような成果と課題を得ることができた。

1　成　果

(1)　「言語活動の基礎・基本」の設定

児童一人一人が，基礎的・基本的な内容を確実に身に付け，自己実現に生かしていけるようにするために，「言語活動の基礎・基本」を「言葉に対する関心・意欲・態度」「言葉に関する知識・理解・技能」「個々の既有の表現や理解の能力」の3観点からとらえ，各時間の学習指導に位置付けた。この結果，児童の中に言葉に対する興味や関心が高まり，自らの力で言葉の意味や働きをとらえ，それを学習や生活に生かしていこうとする態度や能力が身に付きつつある。児童の変容から「言語活動の基礎・基本」を設定したことの有効性がとらえられた。

(2)　「言語活動の基礎・基本」の系統

児童が6年間にわたって「言語活動の基礎・基本」を系統的に身に付けることができるようにするために，今年度は，読みの学習における系統表を作成した。作成に当たっては，実態調査の結果を踏まえながら，学習指導要領に示された理解力や文字，語句，文，文章に関する言語事項を，児童の側に立って活用の視点からとらえるようにした。このことにより，身に付けるべき指導事項がより多面的，行動的にとらえられ，読みの学習における児童の主体的な活動を発達段階に即して具体的に示すことができた。

(3)　児童の主体的な言語活動の展開

各分科会においては，児童の意欲を高める学習指導，個のよさを生かす学習指導を根底に据え，「言語活動の基礎・基本」の定着と活用を図る学習指導の在り方について追究してきた。この結果，学習過程や学習形態の工夫をはじめ，様々な学習活動を工夫・開発することができた。例えば，読みの中で言葉の意味や働きをとらえる活動として，“言葉の関係図”や“言語事項のガイドブック”をつくること，また“言葉の命名”“コマ漫画づくり”などが挙げられる。言葉を楽しんで使う活動としては，“言葉の貯金”“言葉の引き出し”“言葉（既習）を使ったクイズ大会”などが挙げられ，これらはいずれも児童の言語活動をより一層主体的なものにすることができた。

2　課　題

(1)　「言語活動の基礎・基本」を3観点からとらえたが，今後は，思考力や評価力も含め，更に幅広い側面から検討するとともに，表現の学習における系統についても明らかにしていく必要がある。

(2)　児童が，主体的な活動を通して獲得した言葉の知識や技能等を生かして日常の生活の中から問題を見つけたり，既有の知識や技能等を日常の様々な問題場面で活用したりする学習の実践が不十分であった。学校週5日制の意義も踏まえ，児童が基礎的・基本的な内容を学習したことのよさを自覚し，進んで活用できるようにするための指導の工夫が必要である。